

# Morphology & Lexicon Forum 2016

日時 2016年9月10日(土) 13:00~17:55、9月11日(日) 10:00~15:20

会場 慶応義塾大学 日吉キャンパス 来往舎 2F 大会議室

横浜市港北区日吉 4-1-1

東急東横線/東急目黒線/横浜市営地下鉄グリーンライン 日吉駅 徒歩1分

<https://www.keio.ac.jp/ja/maps/hiyoshi.html> (キャンパスマップ9番の建物)

共催 慶応義塾大学教養研究センター

## プログラム

9月10日(土)

受付 13:00

発表1 13:15-14:05

袁曉犇 (エン・ギョウホン) (東北大学大学院生)

語彙概念構造から見る類義複合動詞における語形成の相違—「思い込む」と「考え込む」を対象にして—

発表2 14:15-15:05

崔正熙 (チュ・ジョンヒ) (東京外国語大学大学院生)

日本語から見た韓国語の複合動詞、韓国語から見た日本語の複合動詞

休憩 15:05-15:25

発表3 15:25-16:15

大槻くるみ (東北大学大学院生)

日本語心理動詞文の<する>/<なる>表現とニ/デ格の選択に見られる近代と現代における事態把握の違い

招待講演 16:25-17:55

三宅知宏 (大阪大学)

日本語動詞における「制御性(意図性)」をめぐって —語彙的意味構造と統語構造—

懇親会 18:10-20:00 (会場1F ファカルティラウンジ)

(詳しくは下記の案内をご覧ください。)

9月11日(日)

発表4 10:00-10:50

浅尾仁彦(情報通信研究機構)

フリーな形態論情報データベースと検索ツールの構築

招待発表 11:00-11:50

乙黒亮(早稲田大学)

迂言形の類型から見る形態論と統語論の連続性・非連続性

昼食 11:50-13:30

発表5 13:30-14:20

向井真樹子(高知県立大学)

Compounds in Phase Theory

発表6 14:30-15:20

長谷部郁子(筑波大学非常勤)

「～っぽい」表現とモダリティ

#### 懇親会

懇親会は発表会場1階のレストランで行います。会費は一般5,000円、学生2,000円程度の予定です。参加をご希望の方は、会場校運営委員の杉岡洋子さんにメールで直接申し込んでください。9月4日(日)必着でお願いします。メールアドレス:sugiokaに続けて@sfc.keio.ac.jp(メール件名に「MLF 懇親会」と書いてください。)

#### 日曜日の昼食

11日(日)の昼食は、日吉駅ビルの東急デパート(各種お弁当)や周辺の飲食店をご利用ください。

語彙概念構造から見る類義複合動詞における語形成の相違

—「思い込む」と「考え込む」を対象にして—

キーワード：語彙概念構造、類義複合動詞、移動概念、経路の同定、心理動詞

本発表は類義複合動詞「思い込む」と「考え込む」を取り上げ、語彙概念構造（LCS）の観点から両者における語形成の違いを明らかにするものである。「思い込む」と「考え込む」は共に思考活動を表している点において類義性を持つ。しかし、両者の意味及び構文は異なる。（1、2）は「思い込む」と「考え込む」における意味上の違いであり、（3）は構文上の違いと理解できる。この違いは両者の語形成の在り方とどのように関係するかが問題になる。

- (1) 堅く思い込む/\*堅く考え込む
- (2) \*じっくり思い込む/じっくり考え込む
- (3) Aを正しいと思い込む/\* Aを正しいと考え込む

結論としては、まず「思い込む」と「考え込む」における心理動詞であるV1は移動動詞の有する「経路」の概念を適用できると考えられる。このことを踏まえ、袁（2016）で論証したように、移動動詞の複合に関してはV1の移動経路がV2の意味する移動（起点、途中経路、着点）と同定される必要がある。その際に「思い込む」の場合、V1とV2における着点と同定され、「考え込む」は「起点と途中経路」が同定される。複合に際しての移動経路における同定の部分が異なることから、両者の相違が生じたものと考えられる。

これを論じるために、まず「思う」と「考える」の違いについて考察する。『基礎日本語辞典』では両者の違いを次のように定義している。「思う」は「考える」と違って、刹那的判断ないしは感情の没入で、それだけに対象把握は単一的であって、物事を分析的に眺め捉える知的行為ではない。一方、「考える」は、より客観的となり、精神の思考過程が伴っている。この解釈及び（1）～（3）の

用例から、「思う」は思考活動が断片的に捉えられ、思考の結果に焦点が当てられていること、「考える」は思考の過程に重点を置かれていることが分かる。思考の結果に焦点があることは、移動における「着点」と理解でき、思考の過程に重点を置くことは移動の「中間経路」に対応できると想定される。

V2 について、松本（2009:180）では（4）のように移動を表す「込む」には起点、途中経路、着点が伴うことを指摘した。つまり V2 は移動の全過程を有することが分かる。

（4） （表口から/裏口経由で/部屋に）殴り込む。

複合動詞を形成する際に、V2 は移動の全過程を有するにもかかわらず、V1 と共通する経路項のみが同定される。つまり、「思い込む」の場合、V1 と V2 における着点が同定され、「考え込む」の場合、V1 と V2 における「中間経路」が同定される。その結果として、語彙概念構造上、「思い込む」と「考え込む」における経路項の同定のされ方が異なり、意味的・統語的な差異が生じることになる。

最後に、経路項の同定の在り方（「着点」の同定の有無）によって「思い込む」は「有界性」を持ち、「考え込む」は「有界性」を持たないと考えられる。この点が（5）と（6）における複合動詞の名詞化の有無、つまり「思い込み」が存在するのに対し、「\*考え込み」が存在しないという問題にも繋がると考える。

（5） 「思う-思い」、「思い込む - 思い込み」

（6） 「考える - 考え」、「考え込む - \*考え込み」

参考文献：袁曉犇（2016）「日本語複合動詞の V1 と V2 における経路・方向の重なり—言語類型論の観点から—」『国語学研究』第 55 集、119—130/松本曜（1998）「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114、37—83/森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

崔正熙（東京外国語大学大学院生）

日本語は類型論的に「複合動詞」が非常に発達している言語と言われている。一方、韓国語は日本語に比べて複合動詞の語形成が乏しいとされている。そのため、日本語を学習する韓国語母語話者は、日本語の複合動詞の習得に困難を感じる場合が多い。教育的観点からも日本語と韓国語の複合動詞の相違点と類似点を明らかにすることには大きな意味がある。

まず、日本語では統語的な句との結合が可能な「評価され始める」「言われ続ける」のような複合動詞や、V1とV2が本来の意味を保ち、様々な意味関係で表れる「押し開ける」「歩き疲れる」「持ち上げる」などのような「VV型」の複合動詞、さらには「歌い込む」「震え上がる」「信じ切る」のようにV2が本来の意味を失い、補助動詞的働きをする「Vv型」の複合動詞、いわゆる「アスペクト複合動詞」など様々なタイプの複合動詞が存在する。特に「アスペクト複合動詞」の場合は、生産性が高く、種類も多いため、日本語の複合動詞全体のボリュームを大きくする要因にもなっている。日本語の複合動詞を影山(2013)に基づいて分類すると次のようになる。

- 1. 統語的複合動詞：評価され始める、言われ続ける、説明し終わる…
- 2. 語彙的複合動詞
  - 2.1. 主題関係複合動詞：押し開ける、歩き疲れる、持ち上げる…
  - 2.2. アスペクト複合動詞：歌い込む、震え上がる、信じ切る…

一方、韓国語の複合動詞は、「1」と「2.2」のようなタイプはほとんど存在せず、大半が「2.1」に属するものになる。塚本(2014:31)においても「韓国語では前項を対象に言語現象が生じることができない複合動詞が圧倒的多数である」と指摘しており、「1」のような複合動詞が韓国語では見られにくいことが分かる。また、「2.2」のようなタイプの複合動詞の場合、韓国語では同様の機能を補助動詞が果たしている。韓国語では、V2が本来の意味を失い、文法的機能を果たし、またはV1の動作に対する話し手の心的態度を表す場合は補助動詞として分類されるのである。「2.1」のようなタイプは韓国語の複合動詞の最も典型的なタイプであり、影山(1993)の従来分類である「手段」「様態」「原因」「並列」で考えると、韓国語ではV1がV2の「手段」や方法を表す複合動詞が圧倒的に多く、「並列」を表す場合もあるが、「様態」「原因」を表す複合動詞はごく一部しか存在しないという特徴がある。

一方、両言語の複合動詞と補助動詞を比較すると形態上大きな違いがあることが分かる。日本語の場合は、複合動詞は「V1の連用形+V2」、補助動詞は「V1のテ形+V2」と形態上明白に区別されるのに対し、韓国語は複合動詞と補助動詞のいずれも「V1の連用形+V2」の形式をとるため、その区別が極めて難しい。基本的にはV2が本来の意味を保持している場合は複合動詞、原義から離れ、文法的機能を果たす場合は補助動詞に分類されるが、使用頻度が高く、V1とV2の形態的緊密性が高いため、一つの語として広く認知されている場合は複合動詞として分類され、辞書の見出し語になる場合もある。そのため、その見分け方として辞書の見出し語になっているかどうかを見る場合が往々にしてある。

以上、日本語と韓国語の複合動詞の特徴について簡単に触れたが、本稿では韓国語では存在しないタイプとされている日本語のAspect複合動詞に着目し、両言語の対照研究を行っていく。日本語でAspect複合動詞に分類される自立性を失った後項動詞には次のようなものがある。「～出す、～かける、～かかる、～込む、～上がる、～上げる、～立てる、～立つ、～つける、～つく、～返す、～返る、～回す、～過ぎる、～合う、～通す、～抜く、～切る、～尽くす、～直す、～損なう、～得る、など」

日本語にはこのように様々な種類のAspect複合動詞があるのに対し、上述したように韓国語にはこのようなタイプは存在せず、同様の機能を補助動詞が果たしている。しかし、従来補助動詞として分類されてきた韓国語のV2の中には、結合可能な動詞が限られており、生産性が低いため、-kata (いく), -ota (くる), -cwuta (あげる), -pota (みる), pelita (しまう), -nohta (おく) のような典型的な補助動詞とは性格が異なり、むしろ日本語のAspect複合動詞に近いものではないかと考えられるものが存在する。このような韓国語におけるAspect複合動詞の存在の可能性については既に全敏杞(2013)で考察がなされているが、「V-nata」「V-nayta」「V-tulta」の3タイプに限定されており、補助動詞との違いについても十分な検証がされているとは言えない。本稿では補助動詞全体を対象にして複合動詞のような性質を持つと考えられるものを洗い出し、生産性の高低や、結合可能な動詞の性質、V1との形態的緊密性などを中心に考察を行い、補助動詞との違いを明らかにすることでAspect複合動詞としての可能性を探る。上記の3タイプ以外にも次のようなものが候補として考えられる。

- ①「V1-tayta」：程度のはなはだしいことを表し、日本語では「激しく～する、しきりに～する、～し立てる、～し続ける、～しまくる、～し尽くす」などに訳される。
- ②「V1-chiuta」：V1の行動を簡単に素早く行うことを意味し、日本語では「～てしまう」などに訳される。
- ③「V1-ssahta」：その動作が度を越えるという意を表し、日本語では「～し続ける、～し立てる、～しまくる」などに訳される。①「V1-tayta」と類似している。
- ④「V1-ppacita」：程度のはなはだしいことを表し、「～し切る」などに訳される。
- ⑤「V1-mekta」：V1の行動を強調し、主に否定的な意味として用いられる。日本語では「～てしまう」などに訳される。

#### 参考文献

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』, ひつじ書房.
- 全敏杞 (2013) 「韓国語の語彙的複合動詞におけるAspect複合動詞について—『V-nata』『V-nayta』『V-tulta』の再考と意味解釈を中心に—」 影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』 pp. 331-373, ひつじ書房.
- 塚本秀樹 (2014) 「動詞」, 沖森卓也・曹喜澈(編), 『韓国語と日本語』 pp. 27-34, 朝倉書店.

【キーワード】 Aspect複合動詞、補助動詞、語彙的複合動詞、語形成

## 日本語心理動詞文の〈する〉/〈なる〉表現とニ/デ格の選択に見られる 近代と現代における事態把握の違い

【キーワード：認知歴史言語学／使役／格助詞／好まれる言い回し／通時的変化】

池上 (1981)、岡 (2013)によると、「主体の論理」が強い英語では、主体は場に独立した形で存在するため主語を必要とし、事態の基本形型は〈する〉型(変化の対象を目的語にとる他動詞文など)で、事態把握は個に着目し、その行為に焦点を当てる。他方、「場所の論理」が強い日本語では、主体は場に依存して場に埋め込まれた形で存在する。そのため、主語を必要とせず、事態の基本型は〈なる〉型(自動詞文など)で、事態把握は動作主よりも状況全体の変化に焦点を当てる。このように〈する〉/〈なる〉の選択に関してこれまでは類型が異なる言語を対照させて通言語的に論じられてきたが、同一言語内においても時代によって好まれる表現は変化するのではないだろうか。この仮説をもとに、本研究では認知言語学の観点から、〈なる〉表現が好まれる日本語心理動詞文（羽鳥 1997）において、あえて〈する〉表現が選択される割合を近代と現代で調べることで日本語話者の事態把握の通時的変化を探る。また、〈なる〉表現において心的変化における刺激が個体の存在する位置空間を表すニ格と状況の存在する位置空間を表すデ格（中右・西村 1998）のどちらで表示される傾向にあるかを調べ、個体と状況のどちらに着目する事態把握であったかを合わせて分析する。〈する〉表現とニ格を多用すれば、認知主体は個体に着目する事態把握であることを意味し、より〈なる〉表現とデ格が選択されれば状況に焦点を当てた事態把握であると考えられる。これを探るためにコーパスによって近代と現代を代表する作品や作家の全集の総索引において出現頻度の高い心理動詞 15 個の文例を各時代 490 例集め、〈する〉/〈なる〉表現に分けた。本研究における〈する〉/〈なる〉表現の定義は次の通りである。

- A. 〈する〉：刺激が主語で、変化の対象を目的語にとる自/他動詞の使役文。
- ①自動詞の使役形、②感情の対象を目的語にとる他動詞の使役形、
  - ③〈(刺激)が+(経験者の身体部位・心など)を+(心理動詞)させる〉
- B. 〈なる〉：経験者が主語で、刺激が補語の自動詞文および刺激が目的語の他

動詞文。①自動詞、②感情の対象を目的語にとる他動詞、③〈(経験者)が+(刺激)に/で+(経験者の身体部位・心など)を+(心理動詞)させる〉

以下の図 1 は〈する〉表現の使用の変化、図 2 は〈する〉表現の使用が最も多い動詞「悩む」の〈なる〉表現における二格とデ格の使用の変化である。

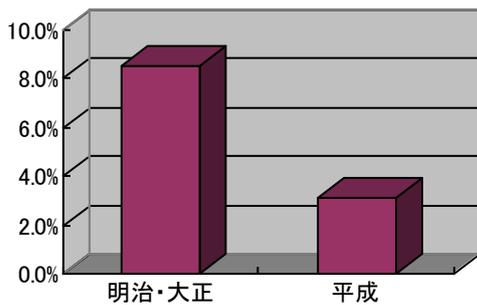


図 1 〈する〉表現の使用の変化

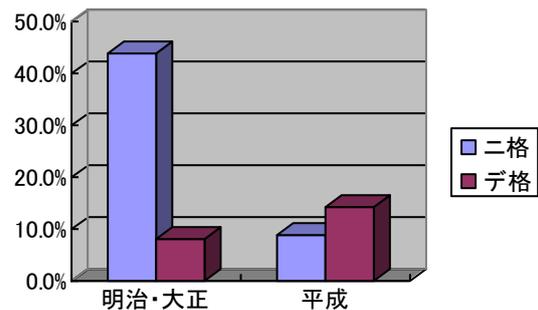


図 2 「悩む」の〈なる〉表現に占める二/デ格の変化

時代間の比率の差の検証として 5%水準で z 検定を行った結果、〈する〉表現の使用頻度は明治・大正の方が平成よりも有意に高いことがわかった。また、明治・大正では二格の使用頻度が非常に高いが、平成ではこれが激減している。この結果から、〈する〉表現と二格が多用された近代では個体に着目する事態把握の傾向にあったが、現代にかけて〈なる〉表現とデ格の使用が増えて、状況全体に着目する事態把握へと変化していったことがわかる。〈する〉表現の使用の増減だけを見れば近代は大量に流入した印欧語の影響も考えられるが、二/デ格の選択に見られる個体への着目か状況への着目かを合わせて分析することで、印欧語は近代の日本語話者の事態把握にも影響を与えたと言えるだろう。一方で、本研究の結果からはその影響が現代には薄れていることもわかった。

## 参考文献

- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』大修館.
- 岡智之. 2013. 『場所の言語学』ひつじ書房.
- 中右実, 西村義樹. 1998. 『日英語比較選書 5 構文と事象構造』研究社.
- 羽鳥百合子. 1997. 「心理動詞の使役性：日英仏語の比較研究」『川村学園女子大学研究紀要』8(1), 川村学園女子大学, 1-17.

## 講演

日本語動詞における「制御性(意図性)」をめぐって —語彙的意味構造と統語構造—

三宅知宏 (大阪大学)

本発表は、日本語動詞の語彙的な意味構造における、「制御性(意図性)」(“CONTROL”)という概念について、再考することを目的とする。

影山(1993)『文法と語形成』の語彙概念構造のモデルでは、「制御性(意図性)」を表す概念として、“CONTROL”が設定され、そして、それは階層的な構造の最上位に位置し、いわゆる「非対格性」を決定するものとされていたが、影山(1996)『動詞意味論』以降のモデルでは、このような仮説は全て放棄されてしまっている。発表の目的が「考察」ではなく「再考」となっているのはこのためである。

本発表の主張は、影山(1993)のモデルで設定されていた「制御性(意図性)」(“CONTROL”)が、日本語における様々な言語事実の分析という記述的な面からも、また、ミニマリズム理論における統語構造との関係という理論的な面からも、重要かつ有用であり、放棄されるべきものではないという点に集約される。

## フリーな形態論情報データベースと検索ツールの構築

キーワード: 形態素辞書、検索ツール、コーパス

本発表では、形態論研究におけるコーパス利用時の問題点を指摘し、その解決案としてフリーな形態論情報データベースの構築を提案するとともに、そのデータベースを用いた研究例を示す。

近年、国立国語研究所を中心として、日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) をはじめとする大規模な日本語コーパス整備が進み、中納言などの検索ツールの利用により、形態論情報を利用した検索が容易に行えるようになった。しかしながら、これを形態論の研究に生かすことを考えた場合に再三直面する以下のような問題がある。まず、形態素解析は実際には「単語解析」に近く、言語学的な意味での形態素レベルの情報を得ることができないわけではない（通常、活用形に関する情報等は得られるが、派生や複合に関する情報は直接には得られない）。また、形態素解析には斉一性の問題が付きまとい、同一の形態素であっても、あるときは単語の一部として扱われ、あるときに単独の単語として扱われる可能性があるため、両方の場合を統一的な基準で検索するのが困難である。BCCWJ で用いられている形態素解析辞書である UniDic (伝他, 2007) の場合、解析の斉一性を重視して作られているが、それでも個々の研究の目的上都合のよい形で扱いが統一されているとは限らない。

例えば、接尾辞「-み」の用例を中納言のようなツールで検索しようとした場合、接尾辞の「-み」という条件で検索するだけでは不十分である。これは、「強み」「深み」のような多くの派生語が辞書に登録済みであり、これらの語が接辞の「-み」を含むという情報は利用できないためである。「-み」で終わる名詞を全て検索することは可能だが、その方法では無数のノイズを含む結果になり簡単な解決策とはならない。最も現実的な解決方法は、接辞「-み」を含む辞書登録済みの語を列挙しておくことである。しかし、UniDic は別途公開されているものの、中納言などのユーザの多くにとってそれを直接参照するのは簡単ではないと思われる上、仮に作業過程である形態素を含む登録済みの語のリストが作られたとしても、共有されることがないため、無駄が生じていると考えられる。

これを解決するには、形態素解析辞書に登録済みの単語に関する派生・複合レベルの情報を整備して共有するとともに、それを簡単に検索できる仕組みを用意すればよい。UniDic は自由なライセンスで公開されているため、これに対応付けたデータを構築することにより、将来にわたって自由に加工・再配布を行うことが可能な、貴重な言語資源となる。英語では、CELEX2 という形態論情報のデータベースが存

在する (Baayen et al., 1996) が、これの日本語版に相当するものとも考えることもできる (ただし CELEX2 は自由なライセンスではない)。

本研究で整備中の情報は以下のとおりである。

(1) a. 派生・複合に関する情報。例えば「早起き」という名詞に対して、これが「早い」という形容詞と「起きる」という動詞の複合であるという情報を付与する。この例の「早い」「起きる」のように、構成素が別途単語として登録されている場合は、各単語へのリンクとして表現する。

b. 音便・連濁など形態音韻的交替を含むかどうかに関する補足的な情報。

データと整備と並行して、このデータを簡単に検索することのできるウェブサイトを構築し、本言語資源を技術的知識がなくとも簡単に利用できるようにする。ウェブサイトでは、UniDic に元々付与されている活用・語種・アクセント等の情報も検索可能とし、これらを組み合わせた検索条件 (例えば、「4 モーラの複合動詞でアクセントが無核のもの」といった条件による検索) を可能にし、幅広い分野の研究に応用可能とする。

データベースの構築にあたっては適宜機械的に複合語かどうか等を判定する手段を援用しつつ、全ての例を手でチェックしている。資源の構築には多くの作業時間を要するが、部分的に公開していきフィードバックを受けることが有益と考えられるため、現在、複合動詞・複合形容詞 (構成要素が立項されていないものを除く) に限定したシステムを構築済みであり、公開に向けて準備中である。

本発表では応用例として、「-直す」など UniDic 上での扱いに統一が取れていない複合動詞を例として、このデータベースと、BCCWJ の検索を組み合わせることで、形態素の生起頻度を迅速・正確に得る方法を示す。

## 参考文献

Baayen, R. Harald., Piepenbrock, Richard., & Gulikers, Leon. (1996). *CELEX2*. Philadelphia: Linguistic Data Consortium.

伝 康晴・小木曾 智信・小椋 秀樹・山田 篤・峯松 信明・内元 清貴・小磯 花絵 (2007). 「コーパス日本語学のための言語資源：形態素解析用電子化辞書の開発とその応用」. 『日本語科学』, **22**, 101-122.

## 迂言形の類型から見る形態論と統語論の連続性・非連続性

乙黒 亮 (早稲田大学)

迂言形 (periphrasis) とは複数の語が組み合わさることによって文法情報を符号する形態を指す。標準的屈折形態 (canonical inflectional morphology) では、ある文法素性が接辞付加、語幹交替などの語形変化によって具現化されるため、その意味では迂言形は標準的屈折形態からの逸脱と考えることができる (Brown et al., 2012)。例えば、英語において未来時制が *will sing* のように表されたり、3音節以上の形容詞の比較級、最上級がそれぞれ *more/most intelligent* のように表されるのは、動詞や形容詞自体の語形変化という標準的屈折形態から逸脱した迂言形による標示である。一方で、迂言形の一部は通常語彙的な意味内容が欠乏した機能的な要素であり、かつ迂言形を構成する各構成要素を単に統語的に合成するだけでは全体の迂言形全体の意味や機能が得られないことも多いことから、標準的統語構造からも逸脱していると言える。この屈折形態、統語構造どちらからも標準型からは逸脱しているという点で、迂言形は形態理論、統語理論において興味深い研究対象となる。とりわけ、形態論と統語論を分離不可能な一元的・連続的なものとみなす反語彙主義な理論と語形成と句構造形成に異なった原理・制約を仮定する語彙主義的な理論において、迂言形は対照的な扱いを受ける。

反語彙主義の理論の例としては、分散形態論 (Distributed Morphology; DM) が挙げられる。DM では音形化が統語的な構造構築後の語彙挿入によって行われ、同種の文法素性を符号するには同種の (統語) 構造が仮定される。よって Embick (2000) が提案するラテン語の総合的語 (synthetic word) と迂言形の分析や Bobaljik (2012) が提示する様々な言語の比較級と最上級の派生に代表されるように、迂言形と総合的語といった違いは語彙挿入の結果生まれる表層的なものであり、その基盤となる構造は共通したものであると考えられる。一方、語彙主義的な理論では迂言形は大きく2通りのアプローチが可能である。1つは厳密語彙主義で、迂言形を構成する各要素は通常の語彙項目としてレキシコン内に規定され、迂言形はそれらが統語的に句構造内で相互関係を結ぶというもので、Börjars et al. (1997) によるラテン語の異態動詞の分析を始めとして、古典的な語彙主義的なアプローチにおける中心的な考え方である。もう1つは形態論を句構造領域まで拡張した拡大的語彙主義で、レキシコン内で複数の語をまとめて記載することで迂言形を総合的語と並行的に扱うことを可能にするものである。とりわけ構造体 (構文; construction) を理論的基盤の1つとして仮定する主辞駆動句構造文法 (Head-driven Phrase Structure Grammar; HPSG) などでは、迂言形をレキシコン内において特定の文法・意味情報を付与された構造体として扱い、迂言形の形成も形態論的に行う提案がなされている (Ackerman and Webelhuth, 1998; Ackerman et al., 2011)。

本発表では、これらのアプローチを批判的に検討し、迂言形は一枚岩の現象ではなく、統語的に構築される分析的迂言形 (analytical periphrasis) と屈折形態でパラダイムの関係から構築される補充法的迂言形 (suppletive periphrasis) とで異なる分析が必要であることを示す。同種の分析として HPSG とパラダイム関数形態論 (Paradigm Function Morphology) による Bonami and Samvelian (2015) があるが、本発表は代替案として語彙機能文法 (Lexical Functional Grammar; LFG) における投射アーキテクチャ (projection architecture) で関数的に迂言形の各要素の語彙的指定を行い、パラダイムの側面について Dalrymple (2015) が提案する形態論を組み込むことで包括的に迂言形が扱えることを示す。

## 参考文献

- Ackerman, Farrel, Stump, Gregory T. and Webelhuth, Gert. 2011. Lexicalism, Periphrasis, and Implicative Morphology. In Robert D. Borsley and Kersti Börjars (eds.), *Non-Transformational Syntax: Formal and Explicit Models of Grammar*, pages 323–358, Oxford: Blackwell.
- Ackerman, Farrell and Webelhuth, Gert. 1998. *A Theory of Predicates*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Bobaljik, Jonathan David. 2012. *Universals of Comparative Morphology: Suppletion, Superlatives, and the Structures of Words*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Bonami, Olivier and Samvelian, Pollet. 2015. The Diversity of Inflectional Periphrasis in Persian. *Journal of Linguistics* 51, 327–382.
- Börjars, Kersti, Vincent, Nigel and Chapman, Carol. 1997. Paradigms, periphrases and pronominal inflection: A feature-based account. In Geert Booij and Jaap van Marle (eds.), *Yearbook of Morphology 1996*, pages 155–179, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Brown, Dunstan, Chumakina, Marina, Corbett, Greville G., Popova, Gergana and Spencer, Andrew. 2012. Defining ‘Periphrasis’: Key Notions. *Morphology* 22, 233–275.
- Dalrymple, Mary. 2015. Morphology in the LFG Architecture. In Miriam Butt and Tracy Holloway King (eds.), *Proceedings of the LFG15 Conference*, pages 64–83, Stanford, CA: CSLI Publications.
- Embick, David. 2000. Features, Syntax, and Categories in the Latin Perfect. *Linguistic Inquiry* 31, 185–230.

### Compounds in Phase Theory

**Key words: Compounds, Phase Theory, Incorporation**

Recursive compounds (Roeper, Snyder and Hiramatsu 2002) pose a problem within Distributed Morphology (Marantz 2007) or Phase Theory (Chomsky 2001, 2008, Marantz 2007) with regard to the derivation. Harley (2009) argues that compounding shows a case of morphology-as-syntax, as it is productive and it can even include syntactically complex phrases (Lieber 1992). This accounts for the behavior of compounds as syntactic  $X^0$ s (indivisibility, etc), as well as the impossibility of phrasal movement out of them. To derive the non-head of a compound, she argues, a Root is incorporated with a category-creating head, forming an nP. Also, the derivation indirectly accounts for the impossibility of discourse antecedence from within a compound.

However, it is impossible to be referred back as a discourse antecedent, so her theory of the non-head of a compound as an nP cannot be right. In addition Root does not have any category-feature, as Zhang (2007) argues, so assuming the head-movement of a root cannot be right.

In this paper I propose a structure for recursive compounds in Phase Theory (Chomsky 2008). Given that compounding is morphology-as-syntax (Harley2009) I propose that a root without a categorical feature is merged with a category-determining feature (Marantz 2007) in the narrow syntax and another root is merged to form a compound word (See (1) for the analysis).

(1) [ $\sqrt{\text{ROOT}}$  [ $\sqrt{\text{ROOT}}$  n]]

First, a root is merged with a category-defining element. The root lacks any categorical features (Zhang 2007). After the derivation of the word another root is merged. This root is merged like the structure shows, because the semantic relations could be of any relations in lexicalised or syntactic compounds. Also, if one assumes that both constituents of the compound are merged with category-defining element the structure the LF does not see which element is the head and the derivation crashes at the LF level. So in my proposed structure only one root is merged with a category-defining head, turning the root into an n. This is labelling in terms of Chomsky (2008).

Here, the compound is transferred to the interpretational component and is spelled-out. The two-member compound with its syntactic head is interpreted semantically and phonologically (cf. Chomsky 2008). This interpretation is different depending on the two roots. By assuming that the two-member compound is a phase, the effect of the Lexical

Integrity condition is explained, as once the derivation is a phase and spelled-out and interpreted the whole compound can, but its members cannot be referred back to as a discourse antecedent.

In this paper I argue that another root without categorical feature is merged to form a right-branching recursive compounds-like *student film society*. The following shows the structure of right-branching recursive compound.

(2) [ $\sqrt{\text{ROOT}}$  [ $\sqrt{\text{ROOT}}$  [ $\sqrt{\text{ROOT}}$  n]]]

Like in the derivation of two-member compounds the head of the whole compound is the category-defining element, n. The whole compound is transferred to the interpretational representation and spelled out as phase (Chomsky 2008, 2011).

(3) [[ $\sqrt{\text{ROOT}}$  [ $\sqrt{\text{ROOT}}$  n] LE [ $\sqrt{\text{ROOT}}$  n]]]

For left-branching recursive compounds, like *peanut butter sandwich*, the structure is represented in (3) and is formed in the following ways. First, a root without category features is merged with a category-defining head. Then another root is merged. This is the derivation of a two-member compound. There is a linking element in left-branching recursive compounds, phonetically realised in Mainland Scandinavian but not in other languages, like in Japanese or English. The linking element is there in the structure for the sake of asymmetry. I assume that the linking element has EPP feature (Okubo 2013), and checks the category-defining feature. The resulting structure is sent to the interpretational component and spelled out as phase.

In the presentation, I will explain how assuming a phase in the structure can capture the word-like accent characteristic of left-branching recursive compounds, as opposed to phrase-like right-branching recursive compounds (cf. Nishiyama 2015).

**Selected References:** Chomsky, N. On Phases, in (eds.) R. Freidin, C. P. Otero, and M. L. Zubizarreta *Foundational Issues in Linguistic Theory*(Cambridge, MA: The MIT Press), (2008), 133–166, Okubo, T. Linking elements as expletives in distributed morphology. In *Proceedings of the 31st Annual Meeting of the English Linguistic Society of Japan*, (2014) 130–136.

「～っぽい」表現とモダリティ

キーワード：接辞「っぽい」、形容詞、主観性、モダリティ、人称制限

本発表で扱うのは、(1)に例示する接辞「っぽい」を伴う表現である。(1a)の形容詞は、基体である「嘘」のような名詞や「荒い」のような形容詞、「飽きる」のような動詞に接辞「っぽい」が付加されることにより形成されたもので、基体が表す性質への傾向が強いことを意味する。(1b)は「っぽい」が時制や相を含む節を補部に選択する例であり、この「っぽい」は接辞よりも助動詞に近い。

- (1) a. 嘘っぽい、粉っぽい、黒っぽい、荒っぽい、安っぽい、飽きっぽい  
b. 彼は昨日会社を休んだっぽい。 / 彼は明日飲み会に来ないっぽい。 / 彼は今こちらに向かっているっぽい。

澤田（1993）などによると、形容詞には(2a)に例示する「深い」のように主語に選択制限を課さないものと「悲しい」のように現在時制で用いられる場合に主語を一人称に限定するものがある。本論では「悲しい」のような人称制限を課す主観的表現を「モダリティ表現」と呼ぶ。(2b, c)に示すように、(1a)のような形容詞には人称制限によりモダリティを示す表現と示しにくい表現の両方があるが、助動詞「っぽい」を伴う表現は常にモダリティ表現である。

- (2) a. {私/\*彼} は悲しい。 / {私/彼} は悲しかった。 cf. この川は深い。  
b. {私/彼}は飽きっぽい。 / {??私/彼}の作業はいつも荒っぽい。 cf. 私の作業はいつも荒い。 / 当時の私の作業は荒っぽかった。 嘘っぽい/嘘くさい  
c. \*私は昨日会社を休んだっぽい。

ところで、形容詞を名詞化する接辞には「さ」と「み」の2種類が存在する。(3a)に示すように「さ」の方が生産性が高く（伊藤・杉岡（2009））、モダリティ表現の「悲しい」は両方の接辞の付加により名詞化が可能だが、(3b)に示すように(1a)の形容詞は一律に「さ」付加のみで名詞化が可能である。また、(1b)の「っぽい」は助動詞であるので「さ」付加による名詞化は不可能である（(3c)を参照）。

- (3) a. 悲しさ/悲しみ、深さ/深み、大きさ/\*大きみ  
b. 嘘っぽさ/\*嘘っぽみ、荒っぽさ/\*荒っぽみ、俗っぽさ/\*俗っぽみ  
c. \*彼が昨日会社を休んだっぽさ。

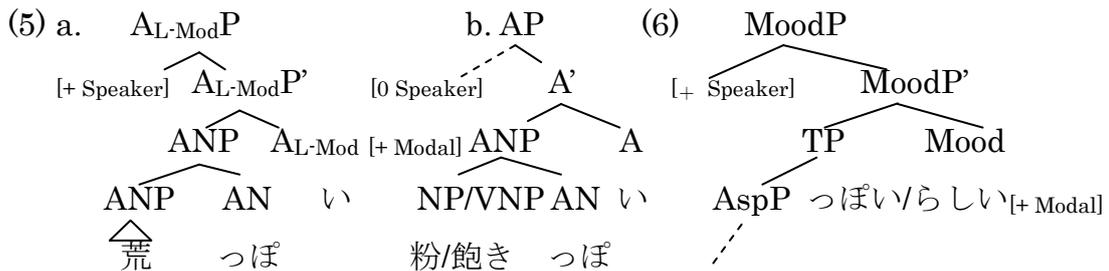
助動詞「っぽい」は一見(4a)のように過去時制を伴うように見えるが、本論では(4a)の「た」は統語構造において T ではなく Mood に生起すると考える（cf. 澤

田 (1993))。また、(4b)に示すように、「っぽい」同様 Mood に生起すると考えられる「らしい」は「っぽい」と共起不可能であるのに対し、CP システムの上部に生起すると考えられる終助詞と「っぽい」は共起可能である。

(4) a. 彼は昨日会社を休んだ {っぽいっぽかった}。

b. \*彼は昨日会社を休んだっぽいらしい。/彼は昨日会社を休んだっぽいね。

以上の事実から本論では「っぽい」は統語構造において下に示す3種類の統語位置に生起可能であると主張する(ANは「形容名詞」(Martin (1975))を表す)。



(5a)はモダリティ表現である「～っぽい」形容詞の構造だが、 $A_{L-Mod}P$ は機能範疇と語彙範疇の中間的な性質を有する準機能範疇であり、「い」が生起する主要部には常に[+ Modal]素性が与えられている。それに対し、モダリティ表現ではない「～っぽい」形容詞の構造である(5b)では、「い」はAPの主要部に生起し[+ Modal]素性を与えられていない。助動詞「っぽい」は(6)のようにMoodPの主要部に生起し常に[+ Modal]素性を備えている。本論では、モダリティ表現の現在時制における一人称制限はこうした主要部の[+ Modal]がCPシステム内の[+ Modal]と呼応することにより課されると仮定する(cf. 長谷川 (2007))。また、「さ」はANPを、「み」は単一の(形容・動)名詞句を補部に選択するAPのみをそれぞれ名詞化すると提案し、(3b,c)における接辞付加による名詞化の可否は(5)と(6)の構造によって説明されると議論する。さらに、助動詞「っぽい」は同じMoodに生起する「らしい」とは共起不可能であるといえることができる。

参考文献：長谷川信子 (2007) 「1 人称の省略：モダリティとクレル」 長谷川信子編『日本語の主文現象』331-369. ひつじ書房./井上和子 (2007) 「日本語のモーダルの特徴再考」長谷川信子編『日本語の主文現象』227-260./伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』研究社./ Martin, S. (1975) *A Reference Grammar of Japanese*, Yale University Press./澤田治美 (1993) 『視点と主観性 -日英語助動詞の分析-』 ひつじ書房.